

故郷

2021.11.25

私の故郷と言えば、福島市であり町庭坂となる。人の話として聞いていて気分がいいのは、親の自慢話と故郷の自慢話なのだそう。とはいえ、私は、人に故郷の自慢などしたことはない。話の流れから出身地の話になると、「庭坂です」と言っている。たいていの人は、ピンとこない。そこで、「運転免許センターがあるところですよ」と言うと、ある一定の年代以上の方は、「ああ、わかりました」となる。免許センターがないとすると、俄然説明するのが難しくなる。庭坂は、そういうところである。

先日、庭坂のあるお店にランチに行った。数年前にできた店である。昔はなかった。それで、久しぶりに、我が故郷の中心部分に足を踏み入れた。空き家が増えていた。何だかさびしい気持ちになってきた。

小学校にも行って見た。昔の木造校舎ではない。新しいと思っていた今の校舎も、随分と歳をとっていた。小学校のすぐ前には、小高い山があり、愛宕神社がある。これは、昔のままだった。ただ、私の記憶では、もう少し高い山だと思っていた。子どもだから、高く見えたのだろうか。

愛宕神社の脇を過ぎると、グーンと急勾配の坂を上り、湯町エリアに着く。湯町とは、昔、高湯温泉からお湯を引いてきたことからついた名前だと小学生のときに習った。ところが、急勾配のはずの坂が、「あれっ」と思うほど、たいした坂ではなかった。私のイメージでは、自転車で上がる場合には、かなり気合いを入れないと上り切れないという坂だった。実際は、そんなことはなかった。人の記憶とは、実に曖昧なものである。

小学校の近くにあったツルタヤさんかというと、まだあった。お店もやっている。昔は、ずいぶんとお世話になったお店である。思い出深いものがある。「中1時代」や「中2コース」をここで買っていた。年間購読するともらえる万年筆も、ここでいただいた。私にとっては、特別なお店なのである。

その近所の〇〇屋さんや〇〇商店などは、建物はあるが、営業はしていなかった。街全体が、さびれた雰囲気漂わせていた。それでも、新しい住宅がどんどん建っているおかげで、小学校の児童数は、それほど減ってはいない。昔からあるスーパーも、場所を変えて元気な姿を見せている。年老いた母親は、このスーパーでいつも買い物をしている。向かいには、ドラッグストアもできた。庭坂にもドラッグストアがあると思うと、感無量である。

庭坂には、実家があるし、お墓もあるため、よく来ている。だが、中心エリアまでは、なかなか足をのばさないものである。私が子どもの頃も、こんな感じだったのかもしれない。小さかったせいで、何もかもが大きく見えたし、立派にうつっていたのかもしれない。

故郷というものは、自分の中のイメージがすべてである。今回、久しぶりに故郷の姿を目にしたからといって、イメージは変わらない。愛宕神社は高く、湯町への坂は急であり、ツルタヤさんは子どもたちの賑やかな声がする活気のある店である。それでいい。